

メイエルホリドの暗い環 II

—そこにはいなかった佐野碩の影—

武田清

1. 偽の履歴書

嫌な予感があった。そして、そういう予感を得てして当たるものである。前稿「メイエルホリドの暗い環——

岡田嘉子の上申書をめぐって——」（本誌第五号 平成六年十月）で、ソ連に密入国した後の杉本良吉・岡田嘉子の軌跡を追いつつ、そこに演出家メイエルホリドを中心にして渦巻いた粛清の暗い環を論じたとき、越境後の岡田嘉子の人生に一点だけ異様に明るく陽気で屈託のない時代があったのだ。岡田嘉子が自伝で語るチカロフ（現オルレンブルグ）時代の生活である。ここに奇妙な違和感を覚えながらも、それ以上調べる術もなく放ってしまったのは、原稿を書いている途中で発見され報道された、モスクワ放送入局時（一九四八年）に彼女が提出した履歴書の内容が、彼女のチカロフ時代の生活を証す

るもののように思われたからである。逆に言えば、この時代のあることが、辛酸をなめつくした彼女の越境後の人生を追っていくうえでの救いでもあった。

しかし、思えばその履歴書が「達者な露文で」書かれていたことに注意を向けるべきであった。話し言葉に比べて、書き言葉の習得は格段に困難であったはずだからである。

岡田嘉子が屈託なさそうに語ったチカロフ時代の生活は全て嘘であった。そのことが明らかになったのは、一九九四年十二月四日にNHK衛星放送で放映された〈わが心の旅〉シリーズの一つ、「ソビエト収容所大陸・岡田嘉子の失われた十年」と、この番組のディレクターであった今野勉の「岡田嘉子の失われた十年」（『中央公論』同年十月号）とによってである。彼女は越境（密

入国)後の十年間をラーゲリ(強制収容所)と秘密警察NKVD(内務人民委員部)の内務監獄で過ごし、いたのであった。

従つて、チカロフで医師のウラジミール・パク氏と結婚してもいず、大変親切なおばあさんアナスタシアも日本語を専門に勉強していたニーナという女性もみな架空の存在だったのである。モスクワ放送局へ提出された「達者な露文」の履歴書は、何者かによつて(恐らくはNKVDの係官によつて)作られた偽の履歴書であつた。前記の放送とレポートによつて、岡田嘉子の越境後の足取りを追つてみることにする。

一九三八年一月七日 NKVDから議長エジョフ名で逮捕状が発行され、二人別々にアレクサンドロフスク(サハリン)へ移送される。後、ハバロフスクへ移送され、苛酷な拷問による虚偽の自白を強制された。

一九三八年二月二日 囚人護送列車でモスクワへ移送された。

一九三八年三月一三日 モスクワのルビャンカ(NKVD本部所在地)の未決監獄へ入れられた。一年以上の拘留と取り調べが続いた。

一九三九年六月二十七日 二人の取り調べが終了し、プ

トゥイルスカヤ監獄へ移される。

一九三九年八月四日 ソ連邦最高会議軍事委員会へ起訴された。

一九三九年八月一二日 被告不在のまま軍事法廷で裁判。

一九三九年九月二十七日 二人に判決が下された。岡田嘉子は禁固十年、杉本良吉は銃殺刑(十月二〇日執行された)。

一九三九年十二月二六日 モスクワ北東八〇〇キロにあるビヤート力第一収容所へ移送された。

一九四三年一月四日 突然呼び出され、モスクワへ移送され、ルビャンカの女性用監獄へ収監された。先に収監されていたマリナンナ・ツイン(チカロフのニーナのモデルで、後のロマン・キム夫人)と同室になる。ソ連の対日戦略の諜報活動に従事していたと考えられる。

一九四七年十二月四日 釈放され、プログレス(外国図書)出版に入る。

一九四八年四月 モスクワ放送外国局日本課に入局。

この後の人生は、彼女が三冊の自伝で述べている通りである。但し、最後の伴侶となった元新派の俳優滝口新太郎との出会いと結婚がやや不自然さを感じさせる(注1)。

2. 佐野碩の影

本稿で書きたいのは、私たちが岡田嘉子にすっかりだまされていたことや、彼女が最期まで女優としての人生を演じ切つて死んだということではない。NKVDの内務監獄を釈放される時、ここで体験したことは一切口外しないという誓約書を書かされていたであろうから、ソ連時代のことは書けなかつたし、また書こうとしなかつたのである。彼女にとつては、自らの凄惨な過去を暴露するよりも、ソ連で演劇の勉強をし直すという杉本良吉との約束を実現させる方がもつともつと残された人生を価値あるものにするのであつたはずである。

私が書きたいのは、彼ら二人が頼つてソ連に密入国した二人の演劇人、メイエルホリドと佐野碩のことである。そのうち佐野碩は、彼らが密入国した時、既にソ連にはいなかったのであるから、より正確には彼の〈影〉と呼ぶべきだろう。〈影〉とはどういう意味かと言えば、既にソ連にいなかったにも拘わらず、ソ連にいた当時スパイ活動をしていた日本人として、疑いの目を向けられていたということである。

サハリンで逮捕された時、杉本良吉は密入国した理由として、左翼の弾圧が激しくなった日本ではまともに演劇活動ができなくなつた、モスクワへ行つてメイエルホ

リドの下で演劇の勉強がしたい、モスクワには日本の演劇人土方与志と佐野碩もいる、と述べた。しかし、越境した当時、杉本とメイエルホリドをつなぐ線は、いかに彼がメイエルホリドの下で演劇の勉強をするために国境を越えたと言つたにしても、全くなかつたのである。二人は一面識もなかつたし、手紙のやり取りをしたこともなかつた。この線をつないだのが、前年の夏までメイエルホリド劇場に研究生として演出助手をしていた佐野碩、しかし、既にそこにはいなかった彼の〈影〉なのである。

かくして三人はNKVDの取調官の手で、杉本・佐野・メイエルホリドと結ぶスパイ網にでつち上げられたのであつた。岡田嘉子の嘆願書が発見され、報道された時、新聞の記者が論じたように、杉本・岡田の越境がきっかけとなつて、メイエルホリドを初めとする自由派知識人、芸術家の粛清が始められたのではなかつたのである。メイエルホリドの逮捕は、スターリンの芸術家粛清の最後の仕上げであつた。

3. 日本のスパイ

一昨年春、モスクワで『私に自由を返して下さい!』と題する一書が出版された(注2)。これは、旧KGB秘書文書の中から発見された、スターリンの粛清によつ

て銃殺されたドイツ人とロシア人芸術家二十人のドキュメント（調査、起訴状、請願書、記録など）を活字に復刻したものである。二十人の中に当然メイエルホリドも入っていて、計十八種の資料が収められている。うち最後の三種は、一九五五年の名誉回復申し立てとその承認に關するものであるから、メイエルホリドの逮捕、肅清に關するものは十五種類である。これらのうちの何種類かは、既に日本語に翻訳されて発表されている（注3）。

だが、これらのドキュメントを読んでいて、私の目を射たことはセキーサノ（佐野碩）の文字の多さと、ヨシマサ・ヨシタ（杉本良吉）の文字の少なさであった。

資料3は、メイエルホリド逮捕の二〇日後（一九三九年七月一日）に取られた調査である。冒頭から佐野碩の名が飛び出してくる。

質問 この前の尋問であなたが証言した、多年にわたつて……

回答 ヘリドとセキーサノは一九三二年、私の劇場にディアメントの署名のある勤務文書をもって、国際労働者演劇連盟（モルト）から一緒に派遣されてきた。ディアメントはモルトを指導していたのだが、

彼らは更にドイツの演出家ビスカートの私宛ての

手紙を携えてきた。彼は当時モスクワに住んでいてモルトで働いており、映画のプロデューサーをしていた（注4）。

調査はこの後、ビスカートと彼の関係が執拗に追及され、そして最後に、いきなりこんな質問が寄せられるのである。

質問 あなたは、スパイ活動でヘリドやセキーサノと関係があつたのか？

回答 ない。私は彼らと関係はなかつた。

取調官は最初から、メイエルホリド劇場で働いていた二人の外国人とビスカートにスパイの嫌疑をかけていたのである。だが、調査はここでプツリと終わっている。吉田好正の名は一度も出てこない。メイエルホリドが逮捕されるビヤンカ監獄に収監された当時、杉本も岡田も同じ監獄にいたか、または取り調べの度に同じ監獄に連れてこられていたにも拘わらず、である。

4. 奇妙な符合

スターリンの肅清の網にかかつて逮捕された日本人は

少なくない。だが、逮捕された者が全て銃殺された訳ではない。そこで、なぜ杉本だけが銃殺されたのか不思議に思われてくる。答えは、杉本が演劇人で、メイエルホリドのところで働いていた佐野碩の同志だったこと、それが消された理由だと言うのは劇作家の斎藤憐である。

今野(勉)　メイエルホリドを逮捕するためにだけ杉

本が必要だったわけで、供述が取れたら抹殺してしまつたんでしよう。供述を翻されたりしないように。

(斎藤)憐　つまり、なんとかメイエルホリドを抹殺

したかつたスターリンのソ連に、うまい具合に日本から越境してきた奴がいる。こいつは佐野碩の仲間だ。

今野(勉)　ええ。杉本をなんであんなに長く調べたかというと、メイエルホリドを逮捕するための供述をそろえたかつた。

そして、斎藤憐は杉本・岡田とメイエルホリドの逮捕取り調べのデータの奇妙な符合を並べてみせる。

三七年七月　佐野碩、国外退去。

三七年十二月　メイエルホリド、「ブラウダ」で批判される。

三八年一月　杉本、岡田越境、逮捕。

三八年三月　杉本、岡田、ルビャンカの未決監獄で裁

判開始。

三九年六月十九日(＊)メイエルホリド逮捕。

三九年六月二十七日　岡田、取調べ、終了。岡田、ブ

テルカ(一種の中継監獄)に移される。

三九年九月(二十七日)　杉本に死刑判決。

三九年十月二十日　杉本、銃殺執行。

三九年十二月二十六日　岡田、ピャートカ刑務所に送られる。

四〇年二月二日　メイエルホリド、銃殺。

(＊)メイエルホリドが逮捕されたのは実際には六月二十日。『昭和不良伝』斎藤憐著　岩波書店　一九九九年)

確かに日付だけを並べてみれば、メイエルホリドの逮捕と杉本・岡田の取り調べ終了は同年同月で、まるでメイエルホリドが逮捕されるのを待つて、取り調べを終了させたようにも読める。更に、今野勉は、メイエルホリドの方の一件書類(ドクメント)を見せてもらった、杉本の自白書と一緒にファイルされていた、と証言しているのである。

だが、もしその通りだったとしたら、メイエルホリドに関するドクメントに吉田好正の名が出てくるのが、な

ぜこんなにも少ないのか。また、杉本（吉田好正）は本
当に供述を翻す機会もなく銃殺されたのであったのか。

実は、杉本は供述を翻し、罪状を否認していたのである。
それどころか法廷に岡田嘉子を証人として召喚する
ことを要求してさえたのである。

旧KGB秘密文書の中から岡田嘉子のファイルが発見
したのは、時事通信社の名越健郎であった。彼は後に杉本
のファイルをも発見した『クレムリン秘密文書は語る』
中公新書 一九九四年。同書によれば、杉本は、一九三八
年十月二二日付調書で強制された自白を否認した。のみな
らず、一九三九年九月二七日にモスクワのソ連最高裁軍事
法廷で開かれた裁判において、次のように反対陳述した。

裁判長 被告が供述しているオオバ、クロキ、スエヒ
ロ、セキーサノはスパイなのか。

杉本 オオバ、クロキ、スエヒロについては私が勝
手に捏造したものだ。佐野は日本のアヴァンギ
ヤルド劇場の演出家であり、米国経由でソ連に
行き、モスクワで演出家として働いている。佐
野がスパイだという私の供述を否定したい。彼
がスパイだったことは一度もない。

……日本にいた時、新聞でメイエルホリド劇場
が閉鎖されたという記事を読んでいたので、取

り調べの時に思い出し、このような愚かなこと
を考えついたので。

……取調官の指示を受け、裁判前に彼女に対し、
裁判では私もスパイと認めるからあなたもそう
述べるようメモを書いた。だから彼女はいまだ
にスパイ供述をしているのだろう。すべて取調
官の指示によるものだ。裁判に彼女を同席させ
てほしい。そうすればすべてわかるだろう。

……ソ連の文学の分野で働くことを夢見て亡命
した。ソ連にいる知り合いは佐野碩だけだ。取
り調べを通じ、拷問や脅迫のため虚偽の証言を
し、無実の人々を中傷してしまったことを深く
反省している。

杉本の、岡田を証人として法廷に召喚してほしいとい
う願いは退けられ、同日判決が下った。最後の最後まで、
杉本は佐野が今もモスクワで演出家として活動している
と信じ切っていたらしい。この頃、佐野碩は既に新天地
メキシコに渡って、演劇活動を再開していたのである
（注5）。

5. 利用された吉田好正

メイエルホリドのドクメントのうち、起訴状（資料10）

は既に日本語に翻訳されている(注6)。

この資料を原文で読んでいくと、私の気にかかることが三点ほどある。一つは、ここで初めて杉本(吉田)の名が出てくるのだが、具体的な事実(?)を述べた本文の最後に四人の連名の一人としてその名が挙げられているにすぎないことである。

一九三四―三五年に、メイエルホリドはスパイ活動に引き入れられた。イギリスと日本の諜報機関の手先となつて、メイエルホリドは反ソ目的のスパイ活動動を積極的に行つた。

反ソ的、トロツキスト組織に所属し、スパイ活動を遂行したことで、メイエルホリド・ライフは自らが有罪であることを完全に認めた。

また、バーベリおよび日本のスパイ、ヨシダ、コレワ、バヤルスキー、コリツォフ・エムの供述によつてあばき出されている。

吉田好正の扱いはこれだけである。本文全体は、前年肅清されたポリシエヴィキの大物政治家ルイコフ、プハーンと、メイエルホリドがいかに関係があつたか、そして「芸術分野における破壊活動」(一)に関して具体

的な指示を受けていたことを、いかに立証する(でつち上げる)かに費やされている。たとえば、「ルイコフの自宅の部屋で、イギリス諜報機関の手先グレイと出会い、オルグになつた」というように。

気にかかることの二つめは、これだけ細かい事実を並べて罪状をでつち上げながら、起訴状の末尾に、(問い合わせ)と称して、「囚人メイエルホリド・ライフ、ウエ、エ、はプトウイルスカヤ監獄へ拘留。この件に関する物的証拠はない。」とわざわざ記されていることである。もともと物的証拠は皆無だったのである。杉本の強制された虚偽の供述があるうとなかろうと、大勢に影響はなかつたのだ。

岡田嘉子の嘆願書が発見され、報道された時の新聞記者の論調は、名越健郎の語つたことの口真似だったのである。

「恋の逃避行はメイエルホリドら自由派知識人、芸術家の逮捕という新たな肅清劇へ意図的に利用されたという構図が浮かんでくる。……杉本の強制自白がメイエルホリド夫妻肅清の口実になつたのは明らかだ。……恋の逃避行はスターリンの演劇、芸術肅清にまんまと利用されてしまつたのである。」(名越健郎 前掲書)

杉本良吉・岡田嘉子の一件資料ファイルを旧KGB秘密文書から発掘してくれたことを私は名越氏に心から

感謝するが、この程度の資料の読み込みでは、いかんせん浅すぎる。ジャーナリストだからソ連の演劇史に無知なまま文章を綴っていいということにはならない。

メイエルホリドを肅清するということは、スターリンにとつて何年も前から既定の方針であった。恐らくその気持ちは、前稿で書いた革命十周年記念の一九二七年にスターリンが観せられた、メイエルホリド劇場の駄作『村に開いた窓』に始まつている。その時から、メイエルホリドを追い詰める策略は周到に練られ、密かに実行に移されていたのである。そのことは、革命二十周年を祝つてメイエルホリドが上演しようとした『ある人生』をめぐる公開検閲局とのやり取りの陰湿さが証明しているが、それは次節に譲ろう。

気にかかるとこの三つめは、今述べたことも直接につながることである。この資料の冒頭右肩には、軍事委員会本部検事アフナーシエフの手によつて、青鉛筆で「有罪。禁固を決定する。本件は一九三四年十二月一日付の法令により審査のため軍事委員会へ回される。」と書きこんであるのである。起訴状の日付は一九三九年十月二七日、アフナーシエフの書き込み日付は一九四〇年一月二四日。メイエルホリドの裁判が行われ、判決が下されるのが一九四〇年二月一日であるから、その一

週間前に既に彼の運命は決定されていたのである。

それにしても一九三四年十二月一日付の法令とは何だろ。これはテロ事件の審理を迅速化、簡略化する法令のことで、奇しくもこの日、レニングラードでスターリンの後継者と目されていたキーロフが暗殺されたことがその成立を後押しした。この法令は、十二月四日に中央執行委員会幹部会決定として「テロリスト行為の準備または実行事件の審理手続き」として公表された。この法令により、「テロル関与の嫌疑でNKVDに逮捕されたトロツキストはすべて、最高裁軍事参与会の審査にかけて、銃殺刑を科すことを決定した」のであった。(富田武著『スターリニズムの統治構造』岩波書店 一九九六年)一九三四年はまた、全ソ作家大会が開催され、唯一公認の基本的創作方法として社会主義リアリズムが承認された年である。

6. 仕組まれた公開検閲

ロシア十月革命によつて全廃されたはずの検閲制度は、革命十周年を祝つた翌年の一九二八年には巧妙なやり方で復活させられていた。この年、全劇場に(芸術評議会)なる組織が設けられ(議長は党が任命した)、上演を予定している演目は事前に、この評議会メンバー(メ

イエルホリド劇場は六〇人の前で公開検閲を受けることになった。

当初、この制度の影響はそれほど強くなかった。マヤコフスキーが提供した戯曲『南京虫』と『風呂』を一九二九、三〇年と連続して上演することができたことが、それを証明している。だが、一九三〇年四月にマヤコフスキーがピストル自殺を遂げてから(注7)、イエルホリドの勢力に陰りが見え始める。

一九三二年にラップ(ロシア・プロレタリア作家同盟)が党の指令によつて解散させられると、全ソ作家同盟が結成され、ゴリキーが議長に就任した。

イエルホリド劇場は一九三三年初め、ゲルマン作『序曲』の上演を許可されたのを最後に、ソビエト戯曲の上演を認められなくなつていく。彼が晩年、『椿姫』などの外国戯曲や『スピードの女王』などのオペラしか演出しなく(できなく)なつていく背景には、今述べたような事情があつた。

スターリンは事の成否を急がない。何度も痛めつけては己の力を思い知らせ、それでいて敵に立ち直るチャンスを与えながら、止めを刺す機会を虎視眈々と狙つていくような人間である。

一九三三年後半、ついに党によるイエルホリド劇場

追い落としのキャンペーンが開始された。だが、その非難攻撃の勢いはまことにゆつくりとしたものであつた。山場は、革命二十周年を控えた一九三六年に到来する。年初から、フォルマリズム(形式主義)に対する大攻勢が始まつた。

イエルホリドは三月、「イエルホリドはイエルホリド主義に反対する」と題した報告を行つて、非難に反撃した。この報告は翌週の『文学新聞』に掲載されて反響を巻き起こした。同月下旬には、モスクワでフォルマリズム問題をめぐる大討論会が開催された。この会場でイエルホリドは発言し、社会主義リアリズム断固拒否、フォルマリズムという公式的解釈の徹底否認を唱へた。

前年、公開検閲制度を管轄する全ソ芸術問題委員会が組織され、初代議長にケルジエンツェフが任命されていた。イエルホリドを最後まで擁護していたのは彼であつたが、翌年の大討論会でのイエルホリドの発言を聞いては、彼にももはや限界であつた。

イエルホリドはそれでも、革命二十周年を祝う演目として、ソビエト戯曲のセイフリーナ作『ナターシャ』とニコライ・オストロフスキー原作の『鋼鉄はいかに鍛えられたか』を脚色した『ある人生』の演出に取りかか

つていた。後者の原作は社会主義リアリズム小説の傑作と賞賛された作品である。

だが、二作ともに公開検閲公演の後、上演を禁止された。既にある一つの決定（メイエルホリド劇場の閉鎖）が下されており、この二作を観客の眼に触れさせぬようにする措置が講じられていたとしか考えられない（注8）。

一九三七年十二月一七日、ついに『プラウダ』紙にケルジエンツエフのメイエルホリド劇場批判の論文「異質な演劇」が掲載された。彼は、その論文を次のような問いかけで締め括っている。

「はたしてかかる演劇がソヴィエト芸術に、ソヴィエトの観客に必要であろうか。」（注9）

三日後、メイエルホリド劇場でこの論文をめぐる公開討論会が開かれた。だが、メイエルホリドはなおも頑として誤りを認めようとはしなかった。翌三八年一月八日、芸術問題委員会は、メイエルホリド劇場を閉鎖し、劇団を解散させる決定を下した。ケルジエンツエフも職を解かれ、逮捕された。（彼もメイエルホリドと同じ一九四〇年に肅清されている。）

だが、メイエルホリドはなおも奇跡的に生き延びる。スタニスラフスキーが彼のオペラ劇場の助手に招いてく

れたからである。皮肉なことに、この当時スタニスラフスキーは社会主義リアリズムの演出家の御手本にされていたのである。

7. 最悪の日ソ関係

杉本良吉と岡田嘉子が越境した一九三八年当時、日ソ両国の外交関係は最悪の状態にあった。三六年の日独防共協定によつて、日ソ両国は次第に対決色を強め、三八年の張鼓峰事件、三九年のノモンハン事件が連続して勃発する。事件と呼ぶから小競り合いのように思われるが、ノモンハン事件は両軍それぞれ二万人近い犠牲者を出した歴とした戦争である。この間、日ソ両国間ではリヒャルト・ゾルゲ事件に象徴されるような熾烈な諜報合戦が展開されていた。

日本側も大使館やソ連各地の領事館を通じて諜報活動を行つていたが、一九三七年にその活動がソ連側に摘発された。「日本人外交官と交際のあつたソ連人六三名が（日本のスパイ）として一斉に銃殺される」（名越健郎前掲書）という事件が起きていた。杉本・岡田が日ソ国境を越境したのは、六三名の処刑判決の下つたわずか三日後のことであつた。

コミンテルン（国際共産主義運動組織）関係者でも、

外国人には国外退去命令が出されていた。土方与志と佐野碩も、この退去命令が出されたことに身の危険を察知して、即座にベルリンへ逃れていたのである。ソ連全土でスパイやテロリスト、反革命分子が摘発され、外国人と一度話ただけで一般市民さえ告発された。一九三七年はスターリンの大粛清の絶頂期だったのである。

従つて、一九三八年当時のソ連で「日本人であること」は、それだけで十分に「偽装スパイ」であると疑われる危険があつた。まして、杉本は達者にロシア語を操つた。スパイである可能性を自ら証明してみせたようなものであつた。

「左翼インテリ」の「舞台監督」である杉本の三八年訪ソは、宮本（顕治）の指令や信認状があつてもなく、かつて中野重治が控え目に指摘したように、「『牢獄と死』の幕場にとびこんだようなものであつた。」（『モスクワで肅清された日本人』加藤哲郎著 青木書店 一九九四年）

繰り返すが、杉本がいかにモスクワのメイエルホリドの下で演劇の勉強をしに行くために越境したと理由を述べても、彼とメイエルホリドをつなぐ線は全くなかつた。また、岡田が後にラーゲリで「メイエルホリドのことを

告白したのを後悔している」と言つて涙を流したにしても、岡田の告白が直接メイエルホリドの逮捕につながつたのではない。彼ら二人とメイエルホリドをつないだのは佐野碩、より正確にはそこには既にいなかった彼の〈影〉なのである。取調官たちはだからこそ、彼らの口から「もう一人の日本人」、メイエルホリドへ直接つながる日本人の名を吐かせたかつたのだ。まだサハリンのアレクサンドロフスクに、またハバロフスクに拘留されている間に、彼ら取調官は二人に佐野碩の名を何とかして口にさせようとした。杉本は既に自ら、モスクワには佐野碩という同志がいると述べていた。岡田もまた、会つたこともない佐野碩の名を記入するよう強制された。岡田は嘆願書の一つの中でこう述べている。

「サハリンで調べられた時に、通訳の人から、佐野は日本のスパイとして捕へられたと云つて新聞を見せられました。が、その時、私はロシア語を一字も知りませんでしたから、それが真実か嘘か、知ることが出来ませんでした。ただ、後に私の自白書に、誰か第三者の名を述べなければならぬので、苦しみの余り、その佐野といふ人の名を書きました。」（名越健郎 前掲書）

NKVD（内務人民委員部）議長エジヨフ名で二人の

逮捕状が発行されたのが、越境四日後の一月七日である。そして、一月中の取り調べの際に、取調官は佐野が日本のスパイとして捕らえられたと嘘をついてまで、岡田に佐野の名を口にさせ、また記入させたのである。ということとは、極東の内務人民委員部の取調官たちは、恐らくモスクワからの指令で、既に佐野の名と彼が何者であるか(日本のスパイ)を知っていたことになる。そして、佐野の名を杉本・岡田に口にさせ、記入させる目的(メイエルホリド逮捕・肅清)をも知っていたかもしれない。佐野が現在モスクワにいるか、いないかなど、どうでもよかつたのである。

8 危険すぎる名

ところで、メイエルホリドのドキュメントの中に「記録」とだけ記された、一九四〇年二月とだけ日付のある奇妙な資料12がある。右肩に「極秘」と印が押してある。

奇妙なのは、これが調書でもなく起訴状でもなく、また被告(メイエルホリド)の請願書でもなく、ただの「記録」であつて、だからこそそこには取り調べ経過中の諸矛盾がそのままに述べられていることである。ひよつとすると、これは罪状でつち上げの裏側を記録した費

重な資料であるかもしれない。

とりあえず、ここでは佐野碩と吉田好正(杉本良吉)だけに絞つて読んでいこう。どうやらNKVDの検事たちは最初、セキーサノとは個人名ではなくて、二人組あるいはグループだと思ひ込んでいたらしい。

「日本人のセキーサノについてのエピソードと出会いも、彼(メイエルホリドのこと―武田)がでつち上げた嘘である。セキーサノは実際には個人で、しかも研究生として彼のところにいたのである。セキーサノの労働報酬は、教育人民委員部モルトの依頼で、劇場に投入された資金から支払われていた。彼のところで、セキーサノとの会話は全くなかつたし、またパリでいかなる手紙も手渡さなかつた。これを彼はでつち上げたのだ。」

検事たちは、こうして拷問によつて虚偽の供述を強制したことを半ば認めながら、次のように書き留める。

「モルトについてのピスカートの会話とセキーサノのスパイ活動についての被告の供述の抜粋が公表される。」

だが、供述に矛盾が多々あることは、検事たち自身が一番よく知つていた。物的証拠は何一つなかつた。だからこそ、そこにはいなかつた者(佐野碩とグレイ)にス

バイの嫌疑をかけるしかなかったのである。

「被告は、これは自分のつくり話だと答えた。セキ―サノは一九三七年にモスクワを去っているし、その年、彼はその研究所を解散したのであった。党組織は、セキ―サノに対して異義を唱えた。いわば、彼にスパイ活動の疑いがかかっているのである。」

では、杉本良吉はどう扱われているだろうか。同工異曲である。

「日本人ヨシマサ・ヨシタを彼は知らなかった。この場合ヨシタにトロツキスト活動との関係があるかもしれないのだが、彼はそれを知っていない。」

これまで見てきたように、杉本良吉・岡田嘉子がソ連に越境した当時、ソ連ではスターリンの大粛清が頂点に達していた。芸術界の粛清はあとメイエルホリドという大物が残っているだけであった。従つて、このときメイエルホリドの名は、口にするだに危険な名になっていたのである。杉本・岡田は、もちろんそのことを全く知らないまま、メイエルホリドと口にしたのである。

メイエルホリド粛清のシナリオは既に出来上がっていたのである。もし、スタニスラフスキーが彼を助けなければ、彼はとつくに逮捕され投獄されていたことであろう。

杉本良吉の死を無駄にしたくない、岡田嘉子のなめつくした辛酸を無駄なものにしたくない、という思いからか、われわれ日本人は時として奇妙なナシヨナリストになつてしまうものらしい。二人の越境はメイエルホリド粛清の最後の仕上げに利用されただけであつた。彼らはメイエルホリドの暗い環に巻き込まれた犠牲者だったのである。

注

1. 升本喜年著『女優岡田嘉子』（文芸春秋 一九九三年）には、「滝口新太郎と岡田嘉子の結婚にしてもソ連の政策であつたとされる」との記述がある。滝口とモスクワ放送ハバロフスク支局時代からの同僚であつた川越史郎はこの間の事情を熟知している立場にありながら、『ロシア国籍日本人の記録』（中公新書 一九九四年）の中では二人の結婚の経緯について黙して語らない。日本国籍を有しながらソ連に残つた日本人は、結婚が困難であり、また国外に出ることは更に一層困難であつたと述べているだけである。

2. "Vernite Mne Svyobodu" (Moskva Medium 1997)

副題は、「ロシアとドイツの文学者・芸術家——スターリンのテロルの犠牲者」。題名『私に自由を返して

下さい!』は、前稿でも紹介した一九四〇年一月三日付のモロトフ宛メイエルホリドの嘆願書中の悲痛な叫びである。

3. 『メイエルホリド——肅清と名誉回復——』佐藤恭子訳(岩波書店 一九九〇年)

4. ヘリドはピスカートルの弟子で、有能な演出家としてモルトへ派遣されてきていた。

5. 佐野碩のソ連脱出後の軌跡については、『ピバ! エル・テアトロ!』藤田富士男著(オリジン出版センター 一九八九年)が詳しい。

6. 『月刊 Asahi』一九九〇年四月号 「ソ連検事があばく・演出家杉本良吉が利用された・スターリン 肅清の真相」

7. マヤコフスキーの死については、近年それが自殺ではなく暗殺ではなかったかとの疑義が提出されている。例えば、『破滅のマヤコフスキー』亀山郁夫著(筑摩書房 一九九八年)や、『きみの出番だ、同志モーゼル——詩人マヤコフスキー変死の謎——』ワレンチン・スコリャーチン著 小笠原豊樹訳(草思社 二〇〇〇年)などを参照。だが、真相はまだ明らかになっていない。

8. 『メイエルホリドの全体像』エドワード・ブローン

著 浦雅春訳(晶文社 一九八二年)この中でブローンは、『ある人生』の上演禁止とメイエルホリド劇場閉鎖の方針とが表裏になっていたと論じている。

9. ケルジエンツェフの論文「異質な演劇」(または「無用の演劇」)は、『暗き天才メイエルホリド』ユリー・エラーギン著 青山太郎訳(みすず書房 一九九二年)に収録されている。